

英語科研究プロジェクト

中高6年間を見通したシラバスの作成(1)
——リスニングのシラバス——

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

鈴木 文子・加藤 裕司・久保野雅史
末岡 敏明・寺田 恵一・八宮 孝夫
平原 麻子

英語科研究プロジェクト

中高6年間を見通したシラバスの作成(1)

——リスニングのシラバス——

(5年計画第1年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

鈴木 文子・加藤 裕司・久保野雅史

末岡 敏明・寺田 恵一・八宮 孝夫

平原 麻子

目次(執筆担当者)

1	はじめに(末岡 敏明)	158
2	シラバスの理論と実例	158
2.1.	シラバスの理論(寺田 恵一)	158
2.2.	シラバスの実例(久保野雅史)	161
3	リスニングのシラバス	164
3.1.	総論(末岡 敏明)	164
3.2.	中学1年生(平原 麻子)	168
3.3.	中学2年生(加藤 裕司)	168
3.4.	中学3年生(久保野雅史)	171
3.5.	英語Ⅰ(八宮 孝夫)	175
3.6.	オーラル・コミュニケーションB(久保野雅史)	177
3.7.	英語Ⅱ(鈴木 文子)	179
4	今後の展望(末岡 敏明)	181

1 はじめに

本校では、1995年に「中高一貫校のカリキュラム構成に関する基礎的研究」と題する全校的なプロジェクトが発足し、95年度入学生を対象に6年間にわたる追跡調査を行い、今後のカリキュラム改革の参考資料とすることが決定された。このプロジェクトに基づき、英語科では95年度（中学1年生）、96年度（中学2年生）、97年度（中学3年生）にアンケートを実施した。その分析結果は、筑波大学附属駒場中・高等学校編『カリキュラム改革調査研究プロジェクト—中・高一貫校のカリキュラム構成に関する基礎的研究1—3』（1996-8）としてまとめられている。

全校的なプロジェクトと連動して、英語科では「中高6年間を見通したシラバスの作成」というテーマのプロジェクトを5ヶ年計画として昨年度に発足させた。このようなテーマを設定した理由は次の2点である。

- (1) 中高6年間を通してコミュニケーション活動をより系統的かつ効果的に行うためには、6年間を見通したシラバスの作成が必須である。
- (2) シラバスの検討と作成を通じて、英語科内で指導目標と指導技術について、共通理解を深める。

また、5ヶ年間の計画は次の通りである。

- 1年次（1998年度）：先行理論・実践に関する調査とリスニングのシラバス・到達目標の作成
- 2年次（1999年度）：スピーキングのシラバス・到達目標の作成
- 3年次（2000年度）：リーディングのシラバス・到達目標の作成
- 4年次（2001年度）：ライティングのシラバス・到達目標の作成
- 5年次（2002年度）：シラバス試案の完成と今度の展望

以下に、1年次の取り組みの結果を報告するわけであるが、内容としては、大きく二つに分けることができる。まず、前半はシラバスを構築するにあたっての理論とその背景に関する考察、および国内外で実際に運用されているシラバスの紹介である。そして後半は、前半で述べられた内容をもとに本校英語科で作成されたシラバスの試案とその実践例の一部の紹介である。

2 シラバスの理論と実例

2.1. シラバスの理論

2.1.1 Syllabus（シラバス）とCurriculum（カリキュラム）について

White（1988）はsyllabusとcurriculumについて次のように述べている。

In a distinction that is commonly drawn in Britain, 'syllabus' refers to the content or sub-

ject matter of an individual subject, whereas 'curriculum' refers to the totality of content to be taught and aims to be realized within one's school or educational system. In the USA, 'curriculum' tends to be synonymous with 'syllabus' in the British sense. (p.4)

White (1988)によれば、イギリスではsyllabusはある特定の科目の内容あるいは主題を指し、一方curriculumはある学校や教育制度の中で教えるべき内容全体と実現すべき目標を指す。アメリカでのcurriculumはイギリスにおけるsyllabusと同義に使用される傾向があるという。

本校英語科で使用している「シラバス」という語は、White (1988)の定義に近いものである。Candlin (1984)もcurriculumに比較して、syllabusは'more localized'であり、実際に教室で起きていることの説明と記録に基づいていると説明している。

2.1.2. Syllabus Designについて

P. Nationは、*Language Curriculum Design* (1996)でSyllabus (Curriculum) Designについて次のモデル(A~E)を提示している。

Nationのモデルに従って、英語科のプロジェクトの全体像を描いていきたい。特に、Assessment (生徒の評価)とEvaluation (シラバスの評価)の部分は重要である。

A. Environment Analysis

Environment Analysisは、Language Courseを取り巻く諸条件の分析である。具体的には、learnerとteacherとteaching situationの分析である。Nation (1996)は、Language Courseのシラバス(カリキュラム)作成を行う際にまずEnvironment Analysisを行うことを提唱している。

現在、国立大学の独立行政法人化など、国立大学の改編が可能性を帯びてくる中で、国立大学の附属校である本校がその存在意義をさらに明確にすることが迫られている。本校で、コミュニケーション活動をより系統的、組織的に行い、教員間の共通理解を深めるために、中高6年間を見通したシラバスを作成することが急務になっている。

B. Needs Analysis

Needs Analysisは、アンケート、インタビュー、テスト、観察、テキストの分析等を通して、learnerのニーズを分析する。

本校でこれまで実施してきたカリキュラム委員会のアンケートやテストの分析等を援用して、本校生の英語教育に対する意識と要求を探っている。カリキュラム改革委員会の調査の下、英語科で1995年度から98年度にかけて、49期生を対象に中学1年から高校1年まで継続して実施したアンケートの結果、「英語の中で興味のあることは何ですか。」という質問に対して、トップの回答は4年間連続して「英語で外国人と話すこと」であった。この結果は生徒のコミュニケーション

ンに対する期待の高さを表している。

C. Principles

Principlesは、Curriculum Designを実施する際の原則である。Principlesは、学習指導の際の具体的な原則であると同時に、理論的な原則でもある。

Principlesは、筑駒6年間のシラバス全体の原則としては、コミュニケーション能力の育成ということがあげられる。また、個別のスキルの分野では各段階の目標も原則と重なる。

D. Goals

A～Cの考察をした後に、Syllabus Designの最も核心の部分のGoalsについて考察することになる。ここで述べるGoalsには次の要素が含まれる。1) Content and Sequencing (内容と配列) 2) Format and Presentation (フォーマットと提示) 3) Monitoring and Assessing (モニターと評価) である。

1) のContent and Sequencingは、本校のシラバスでは基礎期、実践期、発展期のそれぞれの期の目標と具体的な活動がこれに相当する。2) のFormat and Presentationでは、さらに授業における展開のパターンや指導法(指導例)がこれに相当する。3) Monitoring and Assessingは、授業中の監督、観察と、評価(テストを含む)が相当する。

E. Evaluation

P. Nationは生徒に関する評価をAssesment (D. Goals参照) と、シラバスやプログラムについての評価をEvaluationと表現し区別している。

毎年度末に、その年の重点目標について英語科として自己評価(Self-Evaluation)を行っていく。

2.2. シラバスの実例

2002年度から実施される中学校・高等学校の新『学習指導要領』は、リスニング能力（「聞くこと」の言語活動）についてどのように定義しているのであろうか。関連箇所の記述を以下に抜粋する。

<中学校>

1 目標

英語を聞くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。

2 内容

(1) 言語活動

ア 強勢、イントネーション、区切りなどの基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取ること。

イ 自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、具体的な内容や大切な部分を聞き取ること。

ウ 質問や依頼などを聞いて適切に応じること。

エ 話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解すること。

(3) 言語材料

ア 現代の標準的な発音

イ 語と語の連結による音変化

ウ 語、句、文における基本的な強勢

エ 文における基本的なイントネーション

オ 文における基本的な区切り

<高等学校>

・オーラル・コミュニケーションⅠ

ア 英語を聞いてその内容を理解するとともに、場面や目的に応じて適切に反応する。

エ 聞いたり読んだりして得た上表や自分の考えなどをまとめ、発表する。また、発表されたものを理解する。

・英語Ⅰ／Ⅱ

ア 英語を聞いて、情報や話し手の意向などを理解したり、概要や要点をとらえたりする。

ウ 聞いたり読んだりして得た上表や自分の考えなどについて、整理して書く。

・ライティング

- ア 聞いたり読んだりした内容について、場面や目的に応じて概要や要点を書く。
- イ 聞いたり読んだりした内容について、自分の考えなどを整理して書く。

また、Department for Education and Welsh Office (1995) の *The National Curriculum* では、リスニングのシラバスを次のように記述している。『学習指導指導要領』と異なり、発達段階ごとの目標が具体的な行動目標の形で表現されており、シラバス作成の上で非常に参考になる。

Listening and Responding

■Level 1

Pupils show understanding of simple classroom commands, short statements and questions. They understand speech spoken clearly, face to face or from a good quality recording, with no background noise or interference. They may require considerable support, such as repetition and gesture.

■Level 2

Pupils show understanding of a range of familiar statements and questions, including everyday classroom language and instructions for setting tasks. They respond to a clear model of standard language, but may need items to be repeated.

■Level 3

Pupils show understanding of short passages, including instructions, messages and dialogues, made up of familiar language spoken at near normal speed but without interference. They identify and note main points and personal responses, such as likes, dislikes and feelings, but may need short sections to be repeated.

■Level 4

Pupils show understanding of longer passages, made up of familiar language in a simple sentences spoken at near normal speed with little interference. They identify and note main points and some details, but may need some items to be repeated.

■Level 5

Pupils show understanding of extracts of spoken language made up of familiar material from several topics, including past, present and future events. They cope with language

spoken at near normal speed in everyday circumstances with little or no interference or hesitancy. They identify and note mainpoints and specific details, including opinions, and may need some repetition.

■ Level 6

Pupils show understanding of short narratives and extracts of spoken language, drawn from a variety of topics, which include familiar language in unfamiliar contexts. They cope with language spoken at normal speed and with some interference and hesitancy. They identify and note main points and specific details, including points of view, and need little repetition.

■ Level 7

Pupils show understanding of a range of material that contains some complex sentences and unfamiliar language. They understand language spoken at normal speed, including brief news items and non-factual material taken from radio or television, and need little repetition.

■ Level 8

Pupils show understanding of a variety of types of spoken material taken from a range of sources, such as news items, interviews, documentaries, films and plays. When listening to familiar and less familiar material they draw inferences, recognise attitudes and emotions, and need little repetition.

■ Exceptional performance

Pupils show understanding of a wide range of factual and imaginative speech, some of which expresses different points of view, issues and concerns. They summarise in detail, report, and explain extracts, orally and in writing. They develop their independent listening by selecting from and responding to recorded sources according to their interests.

3 リスニングのシラバス

3.1. 総論

3.1.1. シラバスの目的と役割

シラバスを設定する目的は2つある。ひとつは、指導目標を明らかにすることである。これによって生徒が「いつ」までに「何」が習得できればよいのかが明らかになる。もうひとつは、指導目標を実現するための指導方法を明らかにすることである。これによって各時期にどのような「指導」あるいは「活動」を行えばよいのかが明らかになる。

本校英語科では原則として後者は規定しないという方針を取っている。ある指導方法を実行することによってある指導目標が必ず実現されるということが保証されているのなら指導方法を規定する意味があるかもしれない。しかし、そうでないのなら、具体的な指導方法は各教員にまかせ、各教員の個性に合わせた指導が行われる方が、より大きな教育効果が期待できるはずである。ただし、学校教育の責任として、すべての生徒に対してある一定以上の英語力をつけさせる義務があるので、指導目標は規定する。その指導目標を達成するために各教員は実際の授業の中で自分の長所を生かした工夫をすることになる、という仕組みである。これは、各教員が自分の指導方法に固執するという事ではない。同じ目標を目指しているのに異なる指導方法を取る他の教員の授業は大きな刺激となる。このことが英語科全体を大いに活性化する原動力となっている。

3.1.2. 本校のリスニング・シラバス

本校英語科では中高6年間を、基礎期（中学1年・2年）、実践期（中学3年・高校1年）、発展期（高校2年・3年）の3期に分け、各期に応じた指導目標（試案）を設定した。各期の指導目標とその実践例は以下の通りである。この実践例はあくまでも「例」であり、実際の各教員の指導方法を規定するものではないことは前に述べた通りである。

また、次節（3.2.）以降には昨年度の各期の実践がそれぞれの担当者から報告されている。

本校のリスニングのシラバス

(a) 基礎期 (中学1年生・2年生)

◆目標

- (1) 母音や子音が聞き分けられる
- (2) 単語レベル・文単位の聞き取りができる
- (3) 身近な事柄についてのまとまった文章の要点を聞き取ることができる

◆実践例

◇中学1年生

<平常授業>

- ・ミニマルペアを利用した音素の聞き分け訓練
- ・テープ教材やDigital Drum Pad (Sony) を利用した、リズムの意識を持たせるトレーニング
- ・イントネーションの意識化
- ・単語がつながるときの音変化の意識化
- ・NHK「基礎英語」の聴取を義務づける

<LL>

- ・Task-based Listening—*Listen First*
- ・要点を聞き取る訓練
- ・英語の歌

◇中学2年生

<平常授業>

- ・教科書*New Crown 2*の'SOUND'のところで扱われている発音の指導 (発音記号の指導も含めて)
- ・*New Crown 2*の'Listening Quiz'
- ・r-linking, 基本的な音変化, 弱形の指導

<LL>

- ・Task-based Listening (中1よりハイレベル) —*Listen First*

Basic Tactics for Listening

- ・ 要点を聞き取る訓練
- ・ 英語の歌

◆教材

- ・ 教科書を利用
- ・ 副教材を利用—*Jazz Chants* (Oxford University Press) ;
Listen First: (Oxford University Press) ;
Basic Tactics for Listening (Oxford University Press)
- ・ 発音指導教材—*FIA Rhythm Training* (地球人村)

(b) 実践期 (中学3年生・高校1年生)

◆目標

- (1) まとまりのある内容 (対話, 物語, スピーチなど) の概要・要点を聞き取る。
- (2) 聞き取りながらメモをとったり, 自分の意見や考えなどを相手に伝える。
- (3) ニュースや映画など, 初歩的な「本物の素材」(authentic materials) にふれる。

◆実践例

◇中学3年生

- ・ トピックに関連したボキャブラリー・ビルディング
- ・ 音変化に焦点をあてたボトムアップ練習 (弱化, 同化, 脱落に焦点をあてた発音練習とディクテーション)
- ・ リズムを意識した音読練習

<英語 I >

- ・ インターラクション (Oral Interaction) しながら, まとまった内容を聞き取らせる。
- ・ Q & Aを主体にした活動を行う。

<オーラル・コミュニケーションB>

- ・ Natural speedに慣れるリスニング指導
- ・ Listen and speak練習の強化 (LL授業)
- ・ 外国人講師と自然なやりとりを行う。
- ・ 1回で聞き取るという習慣を身につけさせる。

◆教材

- ・教科書を中心に進める。
- ・NHKラジオ「基礎英語3」「英会話入門」「英会話」を聞く。
- ・*Basic Tactics for Listening* (OUP) , *Lost Secret* (メイナード出版)
- ・authentic materialは、VOA (ニュース), *Alice in Wonderland* (ディズニー：映画), *We are the World* (ボニーキャニオン：ビデオ) 等

(c) 発展期 (高校2年生・3年生)

◆目標

- (1) 「本物の素材」(authentic material)に触れ、英語の量・スピードに慣れる。
- (2) やや高度な内容を聞き、その概要・要点を述べる。
- (3) 聞き取った内容に対して自分の意見を述べる。

◆実践例

<英語Ⅱ>

- ・ニュース・インタビュー等のauthentic materialを利用して、自然な英語を聞く。
- ・講演・映画などの映像を通して聞くことで、場面に即した表現を学ぶ。
- ・シャドウイング等の方法でスピーキングにつながる練習をする。

<リーディング>

- ・大学入試問題のリスニング問題を扱う。
- ・テープを使って、スピーキングにつながる練習を行う。

◆教材

- ・VOA, ABC, BBC等のニュース・レポート
- ・*My Fair Lady*, *Jane Eyre*などの映画
- ・『全国大学入試問題正解—英語リスニング問題』(旺文社)
- ・『発音上達のキーポイント』(小川邦彦：日本放送出版協会)
- ・『世界を騒がせた8人の熱き声(向井千秋他—ラリー・キング激録インタビュー集』(朝日出版社)

3.2. 中学1年生 (52期生)

入門期英語のリスニング指導は、「授業をすべて英語で行うこと」これにつきる。

入門期の英語学習においては、まずできるだけ多くの英語音を聞かせることが大切である。音声を出産 (output) できるようになるまでには大量なinputが必要であり、それは母語の習得過程にもっともよく表れている。

いわゆる臨界期学説 (critical period) によれば、思春期直前、すなわち12~13才あたりが外国語 (特に音声) を自然に習得する最後のチャンスとされている。中学1年生はちょうどその時期にあたるわけで、実際に教室での彼らを観察していると、新しい音への反応は動物的といえるほどによい。

このような生徒たちにもっとも有効なリスニング指導とは、授業をできるかぎり英語で行うことである。挨拶を始めとし、small talkや色々なclassroom Englishを駆使して、中1のレベルでも案外自然なコミュニケーションが英語でできるものである。これに加えて、単語の導入や教科書の内容理解もすべて英語で行う。最終的な確認のために日本語の説明を入れるとしても、授業の終わりに5分程度つけ加えれば充分である。

また、昨年度の中学1年生は、ALTとのチームティーチングの授業 (週1回) を5月から始めた。まだ言語材料も語彙もほとんど無いに等しいうちから、50分間もネイティブの英語漬けにして大丈夫だろうかという不安があったが、結果的にはリスニング力をつけるのに大変効果があったと思う。うまくいった原因として、ひとつには、ALTが非常に絵が巧みで、そのうえ演劇を勉強したことのある人物だったため、生徒は「言語情報+様々な刺激」を通じて先生の話を理解できた、という点があげられる。そのほか、ゲームや歌などをふんだんに利用して、生徒を飽きさせず、体ごと英語の世界に浸らせることができた。入門期を指導してもらうALTには、こういったマルチタレント的な才能が強く求められる。もちろん日本人教師もそうであることは言うまでもないが。

以上、簡単に、中学1年生での望ましいリスニング指導のあり方について述べた。

3.3. 中学2年生 (51期生)

3.3.1. 中学2年生のリスニング指導の目標

中学校1年次は、発音が聞き分けられる・非常に易しい内容を正確に聞き取る・身近な内容の要点をとらえるということを目指して授業を行ってきたが、中学2年次は、最後の「身近な内容の要点をとらえる」を少しレベルアップして行った。特にLLの授業では、1年次の教材は現在形しか出てこないし、語彙も相当制限されていたし、教材のテープを読むスピードも多少遅いものであったが、2年次の教材では、よりauthenticなものになっており、スピードもnaturalなものに近づいている。

3.3.2. 中学2年の授業構成

中学2年のリスニング指導について報告する前に、中学2年の授業構成について述べておきたい。授業構成は以下の通りである。

加藤	教科書 <i>New Crown English Series 2</i> (三省堂)	2.5時間
	副読本 <i>The Adventures of Sherlock Holmes</i> (桐原書店)	
	ALTとのティームティーチング	1時間
谷口	スピーチ	
	会話表現など	0.5時間
中澤	LL教室でのリスニングを中心とした授業	
	教材 <i>Basic Tactics for Listening</i> (Oxford University Press)	
	歌の指導など	1時間

3.3.3. リスニング指導の実際

リスニング能力を高めるために、2通りの方法で取り組んでいる。一つは、主に教科書を扱う時間の時であるが、単語の発音やイントネーション・音変化などの練習を積み重ねて、リスニング能力を高める方法である。もう一つはLLの授業で主に行われるのであるが、いきなりまとまった英語を聞いて、その要点をとらえる練習を行うことである。もちろん、教科書とLLとやり方を完全に区別しているわけではないけれども、大まかな方針は述べたように行われた。

3.3.4. 教科書に沿った指導

教科書では、毎課ごとに出てくる語(句)の発音には特に気をつけて指導している。さらに、教科書を読ませるときには、イントネーションはもちろん音変化にも気を使って指導した。また、現在使用している教科書の中に、リスニングの練習をさせる部分(Let's Listen)があり、授業で扱った。リスニングのセッションで扱われている項目は以下の通りである。

1. ピーターの1日
2. 科学博物館で
3. 何を聞かれているのかな?
4. 私は誰でしょう

LLの時間にもっとレベルの高い英語を聞いているので、生徒にとっては容易であったようである。

3.3.5. LLでのリスニング指導

中学2年でLLの教材として使用した*Basic Tactics for Listening*は、1年次に使用した*Listen First*をレベルアップしたような教材で、日常生活での身近なトピックに関して、主に要点を聞

き取るtask-based listeningを行わせる教材である。具体例として、UNIT 5のうちの一例を以下に示す。スクリプトで示してある英語を聞いて日付や時間を書く作業を行わせるものである。

UNIT 5 Dates

1. Let's Listen

Donald is checking messages on his answering machine.

Write the date and time of each event.

1. dental appointment: August 3 - 9:30 a.m.
2. Cindy's party:
3. aunt arrives
4. tennis game
5. meet Francis
6. trip date:

script:

1. This is Dr. Costello's office. We're calling to change your dental appointment to August 3rd at 9:30 in the morning. Thank you.
2. Hi, Don. It's Sue. I'm calling about Cindy's birthday party. It's on July 28th at 8 p.m. Are you free? I'll call you later.
3. Hello, Don. This is Aunt Betty. How are you, darlin? Listen. I'm coming to town next month. I'd love to see you. I'm arriving on August the tenth at 11:15 in the morning. I'll call you from the airport. Bye!
4. Hi, Don. This is Ted. Listen, we can't play tennis on Saturday. Are you free Sunday afternoon, July 26th, around three?
5. Hello, Don. This is Francis. I'll be back from my trip on Tuesday, September 22nd. Let's meet in my office that Tuesday around 6 p.m., OK? Let me know.

実際の英語をお聞かせできないので残念であるが、教材が手に入れば是非聞いていただきたいが、かなり速い英語でも生徒は要点をとれるようになってきている。

3.3.6. ALTとのティーム・ティーチングでの取り組み

ALTとの授業では、授業の進行の基本的パターンは以下のようにになっている。

1. Introduction：最近起こった事件などの話題を紹介
2. 授業当日のストーリーを口頭で説明
3. ストーリーが理解できているか、英問英答
4. 教材シート（ALT作成）によるストーリーの読みの練習
5. ストーリーを生徒に演じさせるなどの練習

6. ストーリーのサマライズとなる英文を完成させる

7. 上記とは別に1時間の授業の終わりの10分程度の時間で、2, 3人ずつ、自分の大事にしているものを英語で紹介させるスピーチの練習を行った。

この時間は、ほとんどすべて英語で行われる。リスニングの能力が身に付かないと、授業についていけなくなってしまうので、いやでも身に付くようになってきている。身に付いたかどうかは、ALTの質問にどう答えているかを見れば（聞けば）容易に判断できる。

3.4. 中学3年生（50期生）

3.4.1. 実践期の目標

実践期（中学3年・高校1年）の目標は次の3点である。

- (1) まとまりのある内容（対話・物語・スピーチなど）の概要・要点を聞き取る。
- (2) 聞き取りながらメモを取ったり、自分の意見や考えなどを相手に伝えたりする。
- (3) ニュースや英語など、初歩的な「本物の素材（authentic materials）」に触れる。

この目標の達成を目指した実践例を紹介する前に「英語が聞き取れない」原因について先ず整理してみたい。

3.4.2. 「聞き取れない」原因はどこにあるのか？

「英語が聞き取れない」原因は、流れた音声を①「文字で見ても理解できない」レベルと、②「文字で見れば理解できる」レベルの二つに大別することができる。

①「文字を見ても理解できない」レベル

この原因として先ず第一に考えられるのは、文法・語彙等の言語面の知識が決定的不足している場合である。出し抜けに未知の外国語（筆者の場合は、例えばロシア語）を聞いたときのことを考えていただきたい。全く理解できず、お手上げである。言語面の知識が決定的に不足した生徒が「聞き取れない」原因は、これと限りなく近い。

また、平易で理解できるレベルの英語であってもその内容に対する知識が決定的に不足していても、理解することはできない。例えば、アメリカン・フットボールのルールを知らなければ、いくら平易な英語で書かれていても、内容を理解することは不可能である。

②文字を見れば理解できるが「音声になると聞き取れない」レベル

このレベルを更に二つに分けて考えることにする。

<「音変化に対応できない」レベル>

音声の場合、数語からなるフレーズがまるで一語のように聞こえたりする場合がある。また、音が脱落したり、合わさって変化したりもする。その結果、文字を見て想像したのとはだいぶ異なった音に変化することが少なくない。このような「音変化」に慣れていないと、平易な表現で

あっても聞き取ることはできない。耳に入ってきた「音の固まり」を、意味のある音にdecodeする能力は、それに焦点化した訓練を経験しなければ身に付かない。

<「速度に対応できない」レベル>

音の固まりを「単語の連続」にdecodeすることはできたとしても、意味を理解する前に次々と新しい音の固まり入ってくるために意味を処理しきれないことがある。これはリーディングの速度との対応が考えられる。スピードを上げて読もうとしたときに、ある速度を超えると文字面は見えていても頭の中で意味がまとまらないことがある。それと原因は同じであろう。

3.4.3. どのように克服すればよいか？

①「文字を見ても理解できない」レベル

このレベルの問題点は「言語面の知識」が決定的に不足していることだ、と先ほど指摘した。その中でも特に語彙力は、4技能（聞く・話す・読む・書く）のうち「聞く」力と最も相関が高い、と言われている。従って、トピックに応じた語彙の拡充が必要となる。

②文字を見れば理解できるが「音声になると聞き取れない」レベル

<「音変化に対応できない」レベル>

中学2年生程度の教科書であっても、音変化に不慣れな場合は正確に聞き取ることが困難である。「言語面の知識」が音声として活用されるためには、弱化・同化・脱落等の音声変化に焦点を当てた指導が必要となる。音声変化に関する明示的な指導の必要性は以下に紹介する例を見れば、明らかである。

先ず、次の怪しげな英文 (1) ~ (4) を見てもらいたい。

- | |
|--|
| (1) We * <u>broughting</u> from Japan.
(2) Did you * <u>keeping</u> in the house?
(3) We * <u>keping</u> outside.
(4) * <u>Giving</u> something to eat. |
|--|

数年前に、筑波大学1年生のリスニングの授業を担当する機会があった。その第1回の授業で、中学2年生の検定教科書（当時の版）のあるページを聞かせて、全文を書き取らせてみた。(1) ~ (4) はその結果現れた典型的な誤りである。

授業はLL教室で行ったので、録音したテープを各自が自分のペースで何回でも繰り返して聞くことができた。さらに、回収前に見直し・点検の時間を与え念のため次のような指示も出した。

- | |
|---|
| ・ディクテーションとは、聴力検査ではない。ある意味では、聞こえなかった音を再構築する作業である。
・再構築作業の際には、語彙力・文法力等を総動員する必要がある。 |
|---|

だが、このように指示しても実際には「聞こえた通り」にしか書けなかったのである。

大学1年生が、ing形は「動詞の原形+ing」、命令文は「動詞の原形」で始まる、というような基本的な文法知識を持っていないとは考えられない。しかし、書いた英文を見直す際にはこの知識が全然活用されていなかったことになる。

本来ならば、自分が書いた英語を見て「おや、こんな風には言えないはずだ。だとすると、実際は何と行っていたのだろう。文法的に考えると、このように言っていたのではないか。」というプロセスを経て、自分の犯した誤りを訂正できなければならない。そうすれば、(1) *broughting, (3) *kepting (過去形+ing) や、(2) Did you *keeping (did...ing形) といった非文法的な箇所は修正できたはずである。

(5) ~ (8) がもとの英文であり、誤りの原因が1点に集約できることが分かる。

- (5) We brought him from Japan.
- (6) Did you keep him in the house?
- (7) We kept him outside.
- (8) Give him something to eat.

下線部に注目していただきたい。学生に共通する弱点がお分かり頂けるだろうか。学生は、弱形で発音される代名詞himの語頭の/h/の脱落に気付かず、それが原因で、非文法的な箇所を修正できなかったものと考えられる。

次の授業で、音声変化(同化・弱化・脱落等)の指導を中学校・高校時代に受けた経験があるかどうかを、学生に尋ねてみた。予想した通り、大部分の学生が指導された経験はないと答えている。この分野の指導の弱さがリスニング力の弱さの一因である、と考えて良いだろう。

そのため、文字を通して接すれば極めて平易な中学2年生程度の英文であっても「自然な口調」で話されると満足に聞き取れない、という事態が起こるのである。

<「速度に対応できない」レベル>

リーディングの速度が極端に遅ければ、自然な速度で話された音声についていくのは不可能である。そこで、リーディングの速度を上げる指導が必要となる。例えば、教師の音読程度の速度で、文章を左から右にリニアに読んでいき、意味のまとまりごとに内容を理解していく練習等が有効であろう。「1分間に数ページ」というような「速読術」の訓練はここでは関係ない。跳ばし読み・斜め読みではなく、line by line (あるいはphrase by phrase) に読み取る速度を上げることが重要である。

以上の分析のうち、①語彙指導、②音声変化の指導に絞って実践を紹介したい。

3.4.4. 語彙指導

検定教科書SUNSHINE English Course 3を使用した日常の授業では、Oral Introductionで本

文の内容を具体的に発展させながら導入している。その中で題材に関連した語彙の拡充を行った。一方、LL教室を利用した週に1時間の授業では筆者が監修・出演した下記のビデオ教材を使用して、集中的に語彙指導を行った。

<ビデオ教材>

『<高校受験>英単語征服ビデオ』基礎編・難関後編各3巻 ※主に使用したのは基礎編

制作：NHKエデュケーショナル／発売：研究社出版

この教材はビデオの映像 (image) と単語の音声 (sound) を強く印象づけることを目指したもので、単語を次に示すような場面ごとに分類して記憶を保持しやすいように工夫してある。

基礎編 第1巻 ①国・場所 ②言葉・人々・ファミリー ③学校 ④スポーツ
第2巻 ①動物・植物 ②自然 ③食事 ④仕事 ⑤交通 ⑥身体 ⑦時・色
第3巻 ①日用品・衣類 ②建物・部屋 ③趣味・音楽 ④生活 ⑤問題・争い

3.4.5. 音声変化の指導

外国人英語学習者用に開発されたタスク中心 (task-based) の教材を使用した。これは、同じ著者の作った *Listen for It* (Oxford University Press) と同様に、平易でありながら自然な英語を用いた教材である。

<リスニング教材>

BASIC Tactics for Listening / J. C. Richards, Oxford University Press

この教材を使用し、次の手順で授業を進めた。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 教材のタスクに沿って「概要・要点の把握」を行う。(2) 言語形式重視 (form-focused) の活動に移り、スクリプト完成形式の部分書取り (partial dictation) を行う。(3) 完成したスクリプトの音読練習を行う。 |
|---|

(2) では、音声変化上の困難点を予測しそこに空所を設けた。この活動を通して、文字で理解できる語句と音声で理解できる語句の間の量的格差を埋めようと考えたからである。

最初の頃は例えば、レストランでのウェ이터の台詞 "What would you like for your main dish?" の下線部は、forが弱化して /f/ としか聞こえないために "few (er)" と聞き取った生徒が目立った。このような音声変化は当初は単なる知識に過ぎない。このような知識に基づいた意識的操作も反復により習慣化すれば、無意識の反応へと次第に変化するはずだと考えた。この変化の好例は自動車 (特にマニュアル車) の運転である。この無意識化に向けた指導として、(3) でスクリプトの音読練習を徹底して行った。強く読む音節がほぼ等間隔に並ぶ (stress-timed) 英語らしいリズムを重視した音読練習を繰り返し、そのリズムを身につけることによって、知識は

「血肉化」し無意識の反応に転化すると考えたからである。

繰り返すが、リスニング指導に当たっては「音声変化」の聞き取り練習に代表されるようなボトムアップ的な指導を地道に継続していくことが必要である。トップダウン的なリスニング指導が現在の流行ではあるが、「与えられたタスクを解決できれば良い」というのでは発展性が期待できない。「音声変化に慣れる」、「意味の処理速度を上げる」と言った地道なボトムアップ的訓練を怠れば、何年学習していても弱点の補強は遅々として進まない。このことは、先ほどの大学1年生の例を見れば明白であろう。

「スキーマの活性化」「内容の類推」等はあくまでも聞き取りのテクニックである。これに過度に依存すると、結果として「聞き取れなくとも、誤魔化すことだけが上手になる」ことになりかねないからである。このことに関しては、3.6.でもう一度詳しく述べることにする。

3.5. 英語 I (49期生)

3.5.1. はじめに

本稿では、49期が高校1年の時に行ったリスニングについての実践を述べる。高校1年では、筆者が担当していた英語 I と平行して、別の担当者によるオーラル・コミュニケーション B (以下、OC-B) 行われていたので、リスニングはそちらの授業で重点的に扱われることの方が多かった。したがって、英語 I においては特別なリスニングの時間を設けることはしなかった。筆者が通常の授業で行ったのは次の3つである。

- 1) 毎回読む本文のオーラル・イントロダクションとして筆者が英語で行う説明を学習者が聞いて理解する。
- 2) 比較的内容の平易な物語のような場合は、余りオーラル・イントロダクションをせず、概要を求めるようなQuestionsを用意し、テープ等で聞き取らせる。
- 3) 投げこみ教材的に、時事的なニュースなどを用意し、生の英語に触れさせる機会を作る。それぞれを少し詳しく説明する。

3.5.2. 具体的説明

(1) オーラル・イントロダクションの聞き取り

これは厳密に言うと「リスニング」ではないかもしれない。オーラル・イントロダクションの場合、耳で聞かせるだけでなく、黒板に視覚的な資料を張る場合が多いからである。例えば、Declaration of Independenceの授業では、背景知識としてアメリカの地図を略記し、どこに何州があるか、特に東部13州について質問し、またそれぞれの州の名の由来なども質問した。当然固有名詞が多く出てくるので、たいいてい文字でも示した。こうなると益々、リスニング活動から離れそうである。しかし、日常生活で純粋に耳だけの聞き取りによる理解というのは意外と少ないのではないか。ラジオの場合は耳だけであるが多くの場合、テレビから情報を得る方がずっと多

いであろう。その場合には、アナウンサーやキャスターは、思ったよりはるかに多く、文字やグラフ、実物模型などを利用しているのに気づく。したがって、普通の授業においてもリスニングを耳だけの活動ととらえず、視聴覚連動した活動ととらえた方が実際的である。その意味で、月並みかもしれないがオーラル・イントロダクションは非常に良いリスニング活動を提供することになる。

(2) リスニング・ポイントを示しての聞き取り

上の主張と矛盾するようと思われるが、内容が比較的平易な場合には、オーラル・イントロダクションで説明するより、むしろリスニングポイントとなるQuestionsを用意して、力試しに耳だけで理解させる機会があってもよい。ただし、その際にはオーラル・イントロダクションで導入すべき新語などを導入していないわけであるから、注意を要する。一つの解決法は、新語で内容理解に必要なものをQuestionsの中に巧みに含めるようにし、質問の際にそれらの意味を確認しておくことである。また質問の内容、配列を工夫することで、本文の内容の骨組みを与えることもできる。例えば、Easter Islandを扱った時に、あるセクションで出したQuestionsは次のようなものである：

- a) How many people were there on Easter Island at the peak in the sixteenth century?
- b) The clans became rivals. How did they show they were greater than others?
- c) What happened around 1550?
- d) A century later, what happened to Easter Island?
- e) How did the islanders' lives change?
- f) Were they able to escape from Easter Island?

これらの質問を見ると、本文を聞く前から16世紀以降のイースター島の歴史が展開されていることがわかる。また、b)のclansは新語であるが、ここで導入し意味を確認することができる。

(3) 時事的ニュースなど投げこみ教材の聞き取り

いつも、教師の発音や教科書付属のテープばかりでは新鮮味がないので、時には生の英語の聞き取りも取り入れたい。この場合、注意することは学習者にあまり背景知識のないものや、分量の多いものは避けるということである。いくつかのキーワードをキャッチすることで「ああ、あのニュースか」とわかるものの方が、多少スピードの速いものでも、学習者は興味を示すものである。したがって、前日起こった時事的ニュースなどが適切なのではないか。5W1Hを中心に概要を聞き、それ以外にどんな情報が聞き取れたかを次に質問する。あらかた出尽くしたら、いくつか聞き取りにくいところなどをブランクにしたハンドアウトを配布し、細かい点を聞き取る練習をする。筆者が扱ったジャイアント馬場のニュースを参考資料として添付する（質問事項とtranscriptionのみ p.183）。

最近NHKニュースなどは2か国語放送しているので、英語版にして録音すれば良いし、Radio Japan（NHKラジオ）のニュースも夜11時台に放送されている。世界的なニュースなら、

American Forces Network (AFN--旧称FEN) でもよい。特に夜10時～12時に放送されている National Public Radio配信のNPR Morning Editionというニュース番組は良い。また、短波放送ではVoice of America (VOA) が外国人向けに行っているSpecial English Programという、ややスピードを落とし語彙も限定語彙内で書かれたニュース番組もある。ただしこれは短波ということで従来音が聞こえにくいという欠点があった。ところが、インターネットの普及によりVOAのホーム・ページ (www.voa.gov) によりReal Audioを通じてニュースをクリアな音で聞くことができるし、ニュース原稿もダウンロードできて便利である。上で述べたNPR Morning Editionもホーム・ページ (www.npr.org/programs/morning) に同様のサービスがある。

3.5.3. おわりに

高校1年は「基礎・実践・発展」中の実践の後半であるから、教科書的なものも日ごろオーラルイントロダクションなどでリスニングの機会として与えると共に、時に教科書を離れて、ややchallengingと思われる生の英語を聞き取る機会を設けてもいいのではないか。ただし、その際、いたずらに難しいものは避けるべきである。語彙的に無理がないとか、背景知識をもっているというような基準でリスニング教材を選んだ方がよい。1度聞いて少しでもわかる部分があれば、2度3度テープをかけることにより、初め速いと感じていたものが徐々に落ちていくようになる。そういう実感を与えることが大切であると思う。

3.6. オーラル・コミュニケーション (50期生)

1998年度の担当者が転出したため、ここに限って1999年度の実践の途中経過を報告することになる。高校1年生は「実践期」の2年目に相当するため、目標は3.4.に示した物と同じである。また、対象学年のうち4分の3は中学3年時(3.4.参照)に担当した生徒である。従って、基本的な授業内容は、中学3年生を踏襲しそれを深化・発展させることを目指したものである。ここでは、そのうち、①スキーマに過度に依存することの危険性と、②速度への対応に絞って報告する。

3.6.1. 「スキーマの活性化」とリスニング力の関係

リスニング指導の場面で、現在「常識」とされ「流行」している活動や考え方は、

- | |
|---|
| <p>①「聞く」前の活動として、話題や視覚資料を提示して「スキーマ」の活性化をはかることが大切である。</p> <p>②全てが聞き取れる必要はない。「概要・要点」の把握が大切である。</p> |
|---|

の2点にまとめられる。

①②の「常識」が誤っている、と言いたいのではない。しかし、これらの活動を偏重するあま

り、その他の活動が軽視されている、とは言えないだろうか。また、この「常識」を曲解したり、履き違えたり、過度に依存することは危険ではないか。ここではその危険性を指摘し、不足部分を補うための実践を紹介したい。

Pre-listening活動として「スキーマの活性化」に過度に依存することの危険性は、リスニング指導を自転車の練習に喩えて考えてみるとよく分かる。子どもが自転車に乗り始める時には、ふつうは「補助車輪」のお世話になる。補助車輪のおかげで自転車は転倒せずに前に進んでいく。しかし、いつの日か補助車輪なしで自転車に乗れるようにならなければならない。果たして補助車輪に頼って乗り続けるだけで、本当に自力で自転車に乗れるようになるのだろうか。

これをリスニング指導に当てはめて考えてみたい。「スキーマの活性化」や内容の類推等の活動は、ある意味で自転車の「補助車輪」と言えないだろうか。多様な補助車輪を工夫しそれを使って練習すれば、本当に「補助車輪なしで」乗りこなせることになるのだろうか。それとも、結局いつまでたっても「補助車輪」に頼らなければ乗れないままなのだろうか。

リスニング指導の「流行」は、「補助車輪付きで乗り続けているだけで、いつか自然に自力で乗れるようになる」と主張することと似ている。確かに、背景知識があり内容の見当がついていることは聞き取り易い。これは、実際に言葉を聞き取る場面を想定すれば、経験的に明白であろう。外国語に限らず母語の場合も同様である。しかし見方を変えると、予め知っていることなので「聞かなくとも分かっていた」ということと、一体どのくらい差があるのだろうか。

「スキーマの活性化」によって、特定のパッセージの聞き取りが「補助」されるのは確かである。しかし、そのことと、「リスニング力が伸びる」ことが短絡的に結びつけられてはいないだろうか。リスニング力とは、極端な言い方をすれば、全く背景知識がなく内容の類推もできない状況で、どれだけ内容が聞き取れるか、ということである。このような経験を積むことなく、手厚い補助を与え続けるだけで、本当に力は着くのだろうか。素朴に考えて疑問である。

3.6.2. 「速度に対応する」練習の必要性—概要・要点の把握だけで充分なのか？

タスク中心 (task-based) の教材が現在の主流である。ここでは、タスクの答え合わせに終始することの危険性を考えてみたい。このような教材では、一部の情報のみ聞き取れば正答は得られる。確かに、現実の言語活動では、多くの情報を聞き流し大切な情報を選択に聞くことが普通である。しかし、このような活動を繰り返していけば、聞き取れる割合は増加していくのだろうか。そうとも言えないだろう。伸びるのは、「リスニング力」そのものではなく、一部しか聞き取れなくとも「何とかする」テクニックなのではないだろうか。結局、聞き取れない箇所は聞き取れないままで終わるのではないだろうか。聞き取りにくい箇所を抽出し繰り返し練習し慣れていくこととていくこと。このような地道な努力を積み上げていかない限り、何年学習しても弱点の克服は望めない。

それでは、どのような「地道な努力」が必要となるのか。それは、3.4.でも指摘した「音声

変化」に慣れる練習と、「速度に対応する」練習である。

リスニングの素材とするのは、あくまで自然な速度・口調で読まれたものである。ゆっくりと読まれたものがいくら聞き取れてもある速度を超えたらお手上げである。その理由の一つは何度も述べているように「音声変化」である。もう一つの理由は、意味の処理速度の問題である。そのために速度に対応するためには、リーディング指導が有効であることは3.4.で述べた。

それに加えて次のような速度に対応する指導も提案したい。準備や手順は極めて単純である。

- (1) 自然な速度で読まれたテープを用意する。
- (2) 意味の区切れ (chunk) ごとにポーズボタンで短時間テープを停止しながら聞かせる。

これだけである。

ポーズを入れることによって、聞き取れた「単語の連続」を意味化する時間を確保することができる。これだけで、随分と聞き取りは楽になる。

また、慣れるに従って、ポーズを入れる区切れの単位を徐々に長くしたり、停止時間を徐々に短くしていくことによって、何の手助けもなく聞く活動へと近づけていくことが可能となる。

3.7. 英語Ⅱ (48期生)

高校2年生では目標としてauthentic materialsを利用して英語を話すスピードできればnatural speedに慣れさせる。またリーディングを主とした教科書だけでは日常的な表現に触れる機会も限定されてしまうのでビデオ、映画等の映像を通して場面に応じた問答や自然な対話表現を学ぶことを授業活動に組み込むようにする。

3.7.1. インタビュー・ニュースなどの実際の物を聞く

インタビューは生徒にとって身近で取り組みやすい教材である。ニュースと同様容易に入手しやすいauthentic materialsのひとつである。高学年の発展期では自己紹介で終始するような内容ではなく、意見や主張が述べられているようなインタビューをとりあげることで生徒の興味を引きつけることが可能になる。聞いたことに対して自分の感想・意見また反論を述べるということ意識させその練習を目指す。年間を通じていくつかのインタビューを聞いたが、聞き取る際の共通した活動方法を述べる。

<活動方法>

- 1 インタビューの内容を問うタスク・シートに目を通す。
- 2 インタビュー全体を通して聞き、何に関するインタビューか簡単に発表する。
- 3 質問に関する部分を2～3回聞かせ、タスク・シートにメモをする。
- 4 全体を通して再度聞き、内容確認をする。メモをもとにインタビューの内容を簡潔に発表

する。

- 5 インタビューで焦点になっている問題に対して生徒の意見を発表する。

3.7.2. ドキュメント、映画など映像を通して聞く

①ドキュメント

BBCやCBSで制作されたドキュメントのような番組を利用することで、映像を通して生徒の興味を持続させることができる。その際ナレーターが語るだけでなく必ずインタビューがあったり、登場している人達の談話があるような番組を選ぶことが重要である。ナレーターだけでは英語のスピードについていけなくなる恐れがあるが、途中でインタビューや談話が入ることにより番組がとりあげている内容や問題の焦点が一層明確になることがある。ドキュメントには長時間のかなりまとまった内容の物が多いが、比較的短時間の物を教材として選ぶことで効果的な授業展開が期待できる。CBSによる「飛び級した生徒」についてのドキュメントなどいくつか教材に利用したが、その代表的な活動方法を以下に述べる。

<活動方法>

- 1 音声のみでドキュメントを2回聞き、その内容を簡単に発表する。長い場合にはいくつかの部分に分けて聞く。
- 2 1で聞いた同じ部分を映像を通して見て、内容を再確認する。
- 3 インタビューの部分を中心に見て、とりあげられている問題は何か発表する。
- 4 画面を見ただけでは理解しにくい内容を2～3回集中して聞き、質問に答える。
- 5 ドキュメント番組全体を通して見て、問題に対する解決方法及び結論は何かを発表する。

②映画

映画は生徒の興味を引く格好の教材である。教室という限られた中で、少しでも自然な英語に触れさせることができる。映画は時間がかかるので、生徒の興味が最後まで持続する作品を選ばなければならない。単語1つでも聞き取れる部分が少しでも多くあれば、「本物が聞けた」という実感を味わえ、生徒の興味も持続するであろう。以上の観点を考慮して、各学期毎に選んだ作品の1つとして*Jane Eyre* (by Charlotte Brontë) がある。作品のプロットが明確で、「次はどんなことが起こるのだろう」と絶えず観る者に好奇心を抱かせる展開である。登場人物の台詞は全体にゆっくりとしたスピードなので語彙が分かると、生徒にも内容が理解しやすい。日本語の字幕つきが良いか否かはその内容や台詞の速さまた観賞後の授業の展開次第で決定すればよい。物語がある程度つかめるまで字幕つき、その後字幕なしという方法もある。

<活動方法>

- 1 映画*Jane Eyre*を3回に分けて観る。映画を観る前に、登場人物の名前を紹介するPeople in this Storyのプリントに目を通す。
- 2 ストーリーの展開で重要な部分や山場を音声のみで聞き、同じ部分をスクリプトで読む。スクリプトを読みながら同時に内容を聞く方法もある。スクリプトはRetold版 (*Jane Eyre: Oxford Bookworms 6 OUP*) を選んだ。
- 3 内容理解のチェックに口頭で答える。
- 4 挨拶、感情的な表現、意見の主張など日常生活で頻繁に使われる表現を中心に対話の練習をする。

4 今後の展望

ここまでの中で、本校英語科が作成したリスニング・シラバスを「試案」として扱ってきた。「試案」であるということは、このシラバスが「仮説」であるということである。つまり、このシラバスが中高6年間の指導を行う上で有効であることを「検証」という作業が今後の課題として残っているわけである。仮説検証の際の観点を以下に3点挙げ、これをもって全体のまとめとしたい。

(1) 知識と技能の問題

リスニングに限らず、英語の運用力は「技能」という要素を強く持っている。しかし、それはあくまで「知識」が無くては成り立たない技能である。単純な例を出せば、知らない単語は聞いてもわからないわけである。また、音変化を知識として与える場合と技能として身につけさせる場合のとギャップをどのように埋めていけばいいのか、というのも知識と技能の問題である。指導目標を達成するのに必要な知識は何か、そしてそれを技能として身につけさせるにはどうすればいいのか、という点を今後明らかにしていかなければならない。

(2) 時間と時期の問題

技能の習得にはある程度の「時間」をかけなければならない。指導目標に到達するのに必要な時間が中高6年間の中で保証されているのか、という問題がある。さらに、もしもリスニングという技能を習得するために必要な時間が3年間の授業数では確保できないことが明らかになったような場合、4年間以上にわたるシラバスの構築が不可欠となり、中高一貫教育の意義が大きくクローズアップされてくる。そのような可能性も含んでいるのが、この「時間」の問題である。また、6年間の中の適切な「時期」に適切な内容の指導を行っているか、という問題もある。例えば、「臨界期仮説」の真偽がこの「時期」の問題と大きく関わってくるのは言うまでもない。

(3) 練習と現実の問題

授業は基本的に教室で行われるものであり、それはあくまで「練習」である。しかし、最終的に生徒が身につけなければならないのは、教室を出て「現実」の世界で通用する英語力である。練習であればヒントを与えたりやさしい教材を与えたりすることが可能である。ヒントを与えた

りやさしい教材を与えたりすることが「現実」の世界で通用する英語力を身につけるのに本当に有効なのか。あるいは、できるだけ早い段階から限りなく現実に近い教材を生徒に与えるべきなのか。「現実」をめざして「練習」はどうあればよいのかという問題も今後明らかにしていかなければならない。

参考文献

- Candlin, C. (1984) . 'Syllabus design as a critical process' in C.J. Brumfit (ed.) 1984.
Department for Education and Welsh Office Education Department (1995) . *Modern Foreign Languages in the National Curriculum*. HMSO Publications Center.
- 文部省 (1998) 『中学校学習指導要領』
文部省 (1999) 『高等学校学習指導要領』
- Lawton, D. and Gordon, P. (1988) . *Dictionary of Education*. Hodder & Stoughton.
- Nation, I.S.P. (1996) . *Language Curriculum Design*. Victoria University of Wellington.
- Nunan, D. (1988) . *Syllabus Design*. Oxford:Oxford University Press.
- 筑波大学附属駒場中・高等学校 (1996) 『カリキュラム改革調査研究プロジェクト—中・高一貫校のカリキュラム構成に関する基礎的研究 1』
筑波大学附属駒場中・高等学校 (1997) 『カリキュラム改革調査研究プロジェクト—中・高一貫校のカリキュラム構成に関する基礎的研究 2』
筑波大学附属駒場中・高等学校 (1998) 『カリキュラム改革調査研究プロジェクト—中・高一貫校のカリキュラム構成に関する基礎的研究 3』
- Ur, P. (1991) . *Teaching listening comprehension*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 和田稔, 羽鳥博愛 (1989) 『改訂中学校学習指導要領の展開』明治図書
- White, R.V. (1988) . *The ELT Curriculum—Design, Innovation and Management*. New York: Basil Blackwell.

<参考資料>

高1英語 3学期 8-1
☆ ニュースを聞き取ろう

2/2/99

1 ジャイアント馬場の死

- * when?
- * why?
- * How old?
- * where was he born?
- * what did he do in high school?
- * why did he retire?
- * when did he become wrestler?
- * what did he do in 1972?
- * how tall?
- * Tsuruta's comment:

高1英語 3学期 8-2
1. Giant Baba's Death

2/2/99

Professional wrestler Giant Baba, whose real name was Shohei Baba, died of liver failure yesterday at a hospital in Tokyo. He was sixty-one.

An official of a professional wrestling organization founded by Baba says "Giant Baba died of liver failure at four minutes after four o'clock yesterday afternoon."

Mr Baba was born in Niigata prefecture, Central Japan. During his high school days, he attracted attention as a promising pitcher and joined the Giants. But suffering from elbow injuries, he retired as a professional player. He became a professional wrestler in 1960. In 1972 he established one of the major professional wrestlers' organizations. Baba had a striking physique -- he stood 2 meters and 9 centimeters tall. He was also known for his dynamic kicks. Baba remained active and popular until the very end.

Professional wrestler Jumbo Tsuruta, whose real name is Tomomi Tsuruta, says Baba's death came as a great shock. He says it was Baba who made him what he is.

The Giants manager Shigeo Nagashima says he was shocked to hear the news. He says he had known Mr Baba since he joined the Giants as a rookie. He says he played catch with Mr Baba and trained together. Mr Nagashima says he wished Mr Baba had lived longer and continued playing a key role in professional wrestling.